
交わった運命の糸

竜志念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交わった運命の糸

【Zコード】

N4293Z

【作者名】

竜志念

【あらすじ】

少年たちは、出会った。

違う思い出と、対極的な性格を持つ少年たちは、偶然を装つた必然によって、街中にある一軒の中古屋、『道明古道具屋』で少年たちは、互いの運命を知り合うことになり、少年たちの運命は、絡まり、ほつれ、他人の運命を、みどることとなる。

絶命の陽気な少年（前書き）

不幸な少年を書きたくなりました。
運命に抗うことすら出来ないほど、打ちひしがれる少年を書きたくななりました。

時間がありませんので、連日で投稿できぬことはやむなしとおもいますが、気長に掲載をお待ちください。

感想なんかもうえるとともともとも喜びますー。
それでは、物語、お楽しみください。

幽霊つかの陽気な少年

『抱えてこるもののが辛いなら身を投げればいい。信じじゆ』¹とが出来ないなら仲間など作らなければいい。分かり合つことを望まないなら分かろうとするな。お前は一人。お前は、誰からも救われない、報われない人生で終わるだけだ』

“私には、お前は救えない。お前を救える人間は、この世には居ない……”

#

睡魔を取り払うために、目覚ましが鳴り響く。その音を拒否するように枕で耳をふさぎ、誰にも声をかけられていないのに「……後5分ぐらい」と言いながら再び睡魔との契約を始めようとする少年。どこにでもある一般高校生の朝の光景がそこに広がっていた。

その光景の中に、当たり前のように割り込み、女が布団を剥ぎ取り、耳に当てていた枕を取る。

「いつまで寝てるのよ！ サッと起きて学校行きなさい！」

「うわっ！ 耳元で叫ぶなって！ え？ 学校？」

寝ぼけ眼で女の姿を確認する。

「ほらっ！ シャキッとしてないと、ダンプカーにはねられても責任取れないわよ」

いつも朝見ている姿だ。真っ白な着物を着て、清潔感があり、透き通るほどに白い肌は、もはや芸術品のよう。頬に触れた手は冷たく、寝ぼけていた意識を覚醒させていく。

「道が言うと、『冗談に聞こえないんだが……』

自分の頬に触れる白く小さな手を少年はゆっくりとはがし、着替えを始める。

「毎度思つただけじゃー。女子の前で普通に着替えるつてどうなの

「……」

「女子？ よく言つよな……ま、見た目は中学生にしか見えないけど」

「ま、それは仕方ないんだよー。わたしだつてもつとナイズバディの状態の方がよかつたのになー」

女は自らの胸を確かめるように何度も揉んでいる。

「ああ、でも、こっちの方が趣味だつたりする？」

「消すぞ……」

制服へと着替えを追えた少年は、胸元から札を取り出し、女へと突きつける。

その札をまじまじと眺めた女は、

「えつと、それ、別に効果ないからね？ ビーで買ったの？ また、悪徳引っかかったね」

クスクスと小ばかにした笑い方をして、すぐさま少年の後ろに回りこんだ。

「こんなにいっぱいアクセサリーみたいにお守り持つてるしやー。全然効果ないよねー」

「うつさい！ 少ない小遣いためて、現実に居ようとしている少年の気持ちなんてものは分からぬだろうよ」

「分かりたくもないけど……」

急にトーンを落とした女の話方に動搖した少年は、

「あ、いや……、『ごめん……』」

「気にすることじゃないよー。いまさら和兄が謝つたって、ビーハイカなることじやないし和兄は優しいなー」

「で、でもよ……」

「はーい、しんみりは終わり！ セツセツと学校行く！」

無理矢理に話を区切らせ、女は少年の背中を押す。

「わ、わかったよ……」

しぶしぶという言葉を背に載せながら、少年は玄関まで行き、玄関にある塩を取り替えてから、

「こつてきます」

自分以外の生活臭のしない、月3万6千円の2ドアの賃貸部屋へ挨拶をした。

「いつてらつしゃーい」

突然の後ろからの挨拶。少年は驚くどころか、そもそも当然のようだため息をつき、

「どうせついてくるだらうが」

「気にしない。気にしない。守り神様なんだからねー」

「……いつてる」

振り返ることもせず、少年は歩きを止めることがなく進みながら話しが続いている。

「で？ 今日はちゃんと授業受けれるの？」

「多分な……途中で何もなければ、普通に授業受けけて普通に帰れるんだがな」

少年はそこで話を終わらせ、

「今日こじやは、何もあつませんよつこ……」

田を開じ、信じる当てのないどこかに居るであらう誰かにお願いをし、少年は自分の住むアパートの敷地から足を出した。

「わつ！… ジ、じめんなさいー！」

打ち水を時季かまわずに走っている大屋さんの冷え切った水を、5月上旬にくらつてしまつた。

「はあ……帰りたい」

家を出て数秒、歩数にして五歩目。少年は空を見上げため息と共に呟いた。

少年は、考えられないほど災難だった。

幽霊の陽気な少年（後書き）

はじめで読んでくださり、ありがとうございます。
次の投稿がいつになるかは分かりませんが、読んでいただいた方を
待たせぬよう精進にいたします！

呪われた陰気な少年

同日、朝三時。地表の人間全てに平等に降り注ぐ目覚めの光よりも先に、霧のかかる薄ぼんやりと明るい路地を少年はゆっくりと歩き、自宅の前に到着した。

「……今日も、また、学校……」

誰に言うでもなく決定されている事項を、恨みを込めて吐き出すように呴いた。

「…………ただいま」「ま

玄関の扉では、鬼の面が出迎え、下駄箱には槍を持った小人が持ち主と待ち靴をどちらも守るうと目を光らせている。

「…………あ、どっちも出張だっけ」

誰に伝えるでもなく、現状確認のために言葉を出した。

「かばんはリビングに置きっぱなしにしたし、両親は昨日から出張か……。部屋の掃除もそろそろしないとダメだし、ああ、今日学校行かなくても……でも、今日の給食好きなやつだ……」

歩きながらこぼすように呴き続ける少年は台所でご飯がたけているのを確認した。

「出かける前に準備して正解だったな……まあ、傍にいたら電子がまなのに焦げるし」

話す相手もいないのに、というよりも、話す相手が居ないからこそ、自分の思考をそのまま言葉にしていくようだ。

「ああ、そろそろいかないと、まだどこで悪徳商法に捕まるか分からぬいからな……」

十四年間という短い人生経験の中で学校への通学路の途中で無理矢理商品を買わされた回数、46回。

「昨日雨降ったし、車のとおりが少ないうちにたどり着かないと」
十四年間という短い人生経験の中で学校への通学路の途中で車に水をかけられた回数、39回。

「……」

前略、道を歩く動物に攻撃された回数、89回。

「なにより、気付かないうちに迷つてゐる」

前略、道に迷つた回数、1789回。

そんなグチをたらしながら、少年は『飯も茶碗へ盛り、冷蔵庫からゴマドレッシングを取り出して『飯へかけて椅子に座つて『いただきます』と言つてから一気に食べた。

「ふあ……」

「ちやうさまでした」

力の抜ける空氣を吐き出したついでのような言葉を漏らした少年は、茶碗を水道でさつと洗い、食器洗い機へと入れて置く。

「じゃあ、いつてくるか……」

リビングへと行き、ほぼ置き何んしているため薄いかばんを持ち、玄関の扉を開けた。

「ふー、何事もありませんように……」

手を合わせ、家の玄関を押んでから、築24年の一戸建てを後にした。

「あ、そういうえば今日転校生来るんだっけ。仲良くなれればいいな……」

内気な少年がよくやるつづらとした幼い笑顔を作り、希望を持つて登校はじめた。

後ろから、同じ制服を着た独り言を話す転校生にて、少年
壱賦 は気がつかなかつた。

陽炎 かげるう

呪われた陰気な少年（後書き）

連日で投稿することに成功しました。
ようやく登場させなくてはいけないキャラクター、主人公が出ました。

次回は、2人が出会います。

出来て、そして終った（前書き）

自分で書いててちょっとキャラが乱れてしまい、修正しました。

出会い、そして絡まつた

ずいぶんと後ろが騒がしい。

その事実に興味を持ったのは登校数分後のことだった。

「いや、だからさー俺だってこんな急にここへ来るつもりなんてなかつたよ？ でもよ、きちまつたんだから文句言うなよな」

間。

「お前の言い分も分かる。普通に電車乗って今までどおりに登校すると思っていたら急に転校していたと知ったのがさっきなんだからな。俺だってそんなの急に知つたら驚くよ？ でもさ、制服違うし！ 向かってた方向だつて違つたし！」

間。

「お前が納得できないとかじやなくて！ なっちゃつたんだから仕方ないだろ！ あつちの高校じや手に負えないからつて、勝手に学校手続き済ませて飛ばされて、通知が着たら決定事項。門前払いもいいとこだ！ お前だつて付ついてきてただろ？」「大きな独り言がずっと聞こえている。

「……うるさい」

相手に、ではなく自分の心情を言葉にするような小声で陽炎は言った。

「……わつきからずつとなんなんだ？ 独り言つてレベルじゃないだろ……誰かと会話してるみたい……でも、相手なんて見えないし、若干上向いて話してると、あいつなんだ？」

一人のとき心情を言葉にする癖のある陽炎は、呟きながらチラツと後ろを振り返つた。

少年と、田が合つた。

すぐに視線を前に戻す。見られた。田が合つてしまつた。

「あの……」

スタスタと近づいてきて少年は陽炎に声をかける。

「ちよ～っと、いいですかね?」

「え? ぼ、僕に何か用ですか……」

「えつと、ええ、まあ」

その反応に困ったような態度をしながら、少年は続けた。

「同じ、制服ですね。山陽高校、ですよね?」

「ええ、まあ……」

間違つてはいない。

田を呑わせようとしない陽炎の田を覗いて下から覗き込む少年。

「な、なんですか」

「いやあ、……ちょっとだまつて」

言葉を区切り、横に向かって低い声で言つた少年は、今のをなかつたことにする勢いで、

「同じ高校に行く人に道ですれ違つことがなくてですね。不安とか淋しさとか、心配とかあります。高校はこっちでいいんですよね?」

それが原因でこの少年は空中に向かって会話をしていたのだろうか。

「あれ? もしかして高校違うんですか? 私立だから、制服が違うと思ってたんですけど、ここいら辺つて全部同じなんですかね?」

「あ、いや……あつてますよ。同じ学校です」

「あ、なんだよかったー。ああ、自己紹介してませんでしたね。俺は和兄。わけ浜井和兄。よろしく」

差し出された右手をやんわりと拒絶し、陽炎は関わりたくない、という雰囲気を出しながら歩き出す。

「ああ、ちよ～っと、待つてくださいよー」

そんな空氣を完全無視して和兄が再び話しかけてきた。

「クラスつて何組なんですか?」

「……」

「ああ、五組ですか! なんだあ、一緒じゃないですか」

自分にとつて一番一緒に居て欲しくない性格のやつがクラスに増

えるのか……

「あれ？でもこれって先に言つたやつたら、転校生の楽しみってないんじゃないですかね？」

まず男子という時点でクラスの半数のやる気はそがれているである。

「あんまりあつちの学校じゃ友達いなかつたんですねー」

楽しげに一人で話し続ける少年の言葉に、陽炎は疑問を感じた。

「このような陽気な性格の人間に、友達が居なかつた？」

「……なにか、したんですか？」

この少年が犯罪をしたという仮定で訊いてみた。

「いえいえ、なにもしてませんよー。実際にしてるのは俺じゃないですし」

「え？」

「あー、JRへこり」といつから友達出来ないんだよなあ」

「…………」

「あ、あれ？ 引いちゃいましたか？」

「い、いや、大丈夫、……そういう人結構知つてるから」

「そういいながら距離とるのやめてくれません！？」

決定、この少年、浜井和兄は厨二病患者である。そう結論づけて、陽炎は少年に対する視察を停止した。

何故このような少年が、この学校にきたのか。その疑問は、完全に解決されたわけではなかつたが……。

一切足を止めることがなく会話を続けていた（一方的に和兄が話していた）ためか、校門が見えてきた。

私立山陽中学、高等学園。通称サン高。この学校では、いたるところに監視力メラ。録音機能内蔵の鏡。常に校門に監視員。制服には発信機がついている。在学生を監視、調査することを目的に作られた高校である。

田舎で、そして絡かった（後書き）

わあ、みなさん。勘違いにお戻りですか？

中等部、二年い組（前書き）

会話の途中で投稿してみます。

校門をくぐるとほぼ同時に、はつとした表情になつた浜井は、「俺、職員室に行かなくちゃ行けないから！」

大きな声で宣言すると、浜井は陽炎の方を見ながら走り出す。案の定、人にぶつかりペコペコと頭を下げている。なぜか自分まで睨まれた。理不尽である。

中等部の校舎と高等部の校舎は入り口から鏡写しのように見えるのは前方からのみで、上空から見れば、明らかに後頭部の方が使用面積が広い。比率にすると中等部3、高等部5、共同使用場所2ほどだ。

イヤイヤながらも教室の扉を開け、通わなくてはいけない教室では、転校生が来ることにそわそわしている雰囲気はなく、いつもどおりの各々が楽しんでいる雰囲気しかない。

「おー、おはよう」

入り口に一番近い席に座り、男子大半（八割強）の中心人物となつている遊馬^{ゆま}仁^{ひとし}士^しが何の気兼ねもない誰にでもする挨拶をしてきた。

「……おはよう」

相手の状況に關係なく話しかけてくる遊馬は、そのおかげで気分が晴れた、とか、ずっと一緒に居てくれて頼もしい、とか、誰にでも接し方が同じだから信用できる、とか学年の信頼をかつてている、中心人物だ。

こういう人間は、何を考えているのか、全く想像もつかない。視察すること 자체を放棄して、窓側最前列に荷物を置き、かばんだけを置いてすぐさま教室から出て行つた。

教室を出すぐの階段を上り、めつたなことでは人の来ない、屋上の入り口（屋上は立ち入り禁止）でいつもの癖が出る。

「……遊馬、ね」

皆からの尊敬や友人としての眼差しを受けている、遊馬仁士を、不思議な生き物を見るような視線で見てしまった。無意味に焼けた小麦色の肌、こげ茶がかつたただあるだけの髪の毛、伸ばされる腕の先には、体格の割りに大きな手が付いて……その情報を無理矢理に終わらせる。

「はあ……自分のこういつところがダメなんだろうな……」

「何がダメなの？ 何も悪いことしてないじゃん」

落としていた視線の先に、上田すかいで視線を合わせてくる少女が居た。

「ああ、そういうえば、高等部にまた一人増えるらしいよ。何でも、他人には見えないものと会話してるとか……」

その姿勢のまま、文脈の繋がりのない会話を少女は続けている。

「……見えない、もの？」

会話の内容よりも、いつからそこに居たのかを先に問うべきはずのところを陽炎は会えてスルーした。いまさら驚くほどのことではない。

遊馬とは違った意味で相手の雰囲気に関係なく話しかけてくる少女、安本照は、訊いてくれた事自体に喜びを感じたらしく、笑顔になりながら続けた。

「そう、本人は幽霊だー、とか言つてゐみたいだけど、この『』時世幽靈なんてもの信じられないよねー」

「そんなこと言い出したら、ここに居るやつら全員信じられないやつばっかりだぞ……」

陽炎が唯一、まともに会話が出来る少女は、ショートカットを数ヶ月放置したような、若干伸びてきている灰色に近い髪を花柄のピンセットでとめている。背筋を伸ばして会話をしても視線が合つことがないからわざと腰を曲げて相手の視線を落として誤魔化しているのだろう。

「まあそれもそなうなんだけどさ……まだ私たちつて、高等部に比べたら普通でしょ？」

中等部二年(後書き)

早速続お書き始めます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4293z/>

交わった運命の糸

2011年12月21日21時46分発行